

日高町による南相馬市の被災馬受け入れ

地域の特徴を生かした北海道らしい復興支援



地域の特徴を生かし、地域にある施設や人材、ノウハウを有効に活用して側面からの復興支援を実践しているのが日高町です。日高町は、東京電力福島第一原子力発電所の事故により計画的避難区域や警戒区域に一部の地域が当てはまる福島県南相馬市で、伝統行事や乗馬用に飼われていた馬を受け入れ、今年5月末をめどに町内で飼養しています。

被災馬受け入れで注目を浴びた日高町を訪れました。

20年以上の交流が結んだ支援

2006年に旧日高町と旧門別町が合併して新設された日高町。旧門別町である門別地区は、明治時代から馬産地として知られ、時代によって軍馬、農用馬、競走馬と用途は変化してきましたが、馬の生産と飼育が地域の産業として根付いています。



1990年の「^{うま}午年」を機に、馬にかかわりのある全国の市町村が集まって「全国市町村ホースサミット連絡協議会（以下、協議会）」が発足しています。これは、地域経済や生活文化に対する馬の活用方策を考えるとともに、馬文化を発展させていこうと、全国から馬にかかわりの深い市町村が参加してネットワークを構築し、地域振興を図っていこうと設立されたもので、現在は全国から15市町村が参加しています。発足した'90年には浦河町で第1回の全国市町村ホースサミットが開催され、その後、加盟市町村の持ち回りで定期的に開催されています。

日高町（当時は門別町）と南相馬市は、発足時から協議会に加盟し、20年以上にわたって交流がしてきました。特に、南相馬市は長く協議会の事務局を務めていましたが、2009年に日高町で第19回のホースサミットが開催され、事務局が日高町に引き継がれることになったため、職員間の連携もありました。

東日本大震災後、日高町では被害を受けた協議会に加盟している市町村への支援を検討してきました。東北地方からは6市町村が加盟していますが、それぞれの被害状況を調査したところ、南相馬市の被害が最も甚大なことが分かりました。そこで、日高町では南相馬市に的を絞った支援を検討することになりました。

具体的な支援策を検討していた時期に目に留まったのが4月5日付の北海道新聞の記事でした。そこには、被災した南相馬市で飼われている馬1頭が共和町に引き取られたこと、飼い主が避難するなどして市内には馬数百頭が取り残されていること、長沼町にある特定非営利活動法人引退馬協会北海道事務所が被災馬の引き取りや一時受け入れが可能な牧場を探していることなどが記されていました。

南相馬市では、1千年以上の歴史を誇る国指定重要無形民俗文化財「^{そうまのまおい}相馬野馬追」が毎年7月に開催

されています。相馬市と南相馬市にある三つの神社の神事で、^{かつらぎ}甲冑競馬や騎馬武者が街を練り歩く「お行列」などが行われ、500頭もの馬が参加しているといえます。また、同市では乗馬も盛んで、これらの馬はほとんどが個人で飼養しています。しかし、福島第一原子力発電所の事故により、原発から半径10～30km圏内にある同市の南部では馬を置いて逃げざるを得なかった人もおり、馬が街をさまよっているような状況も見られたそうです。

新聞報道でそのような状況を知った三輪茂日高町長は、その日のうちに南相馬市の被災馬を受け入れることを決定。すでに被災馬の対応について動き出していた、前述の引退馬協会北海道事務所とも連絡を取り合いながら、受け入れ態勢を検討しました。

民間企業の支援で、自己負担ゼロで受け入れ可能に

4月14～16日には、日高町職員2名と獣医1名が南相馬市を訪問し、現地の被災馬の状況を確認。また、4月15日に開催された町議会臨時会では「南相馬被災馬支援事業補助金」として2,395万円の補正予算を可決。この日には町内の関係者を集めた第1回被災馬受入対策会議も開催され、対応などについて具体的に議論を始めていきました。

そして、日高町では被災馬受け入れの条件として、所有者が確認でき、避難の必要がなくなったときに所有者が引き取ることができること、所定の検査や予防接種を受けていること、放射能にかかわる所定の検査を受けていること、日高町までの移送に耐えられる体力があること、受け入れ頭数は50頭をめどとすることなどを決定し、南相馬市に被災馬を預けたいという人たちがいないかを集約してもらうことにしました。

しかし、この時点ではすでにいったん避難が終了しており、日高町で預ける場合は再避難となることや、被災馬を預ける場合に1カ月3万円の負担金を所有者

に課していたことなどから、日高町に馬を預けたいという希望者はなかなか集まりませんでした。

そんな中、世界の競馬産業のリーダー的な存在であるダーレー・グループの日本法人で、日高町にオフィスを置くダーレー・ジャパン(株)から、被災馬受け入れに使ってほしいと、日高町に1千万円の寄付が寄せられました。この寄付金を活用し、馬の所有者の1カ月3万円の自己負担をなくしたことがきっかけになり、日高町への移送を希望する人が出てくるようになりました。所有者にとっては、広い北海道の自然の中で飼養できることも日高町への預け入れを検討する要素の一つになったようです。

36頭の被災馬が日高町へ

日高町は7月5～7日に再度職員を南相馬市に派遣し、具体的な移送について調整を行いました。できるだけ早く日高町への移送を進めたかったものの、手続き上の問題や馬運車の確保と日程調整などに手間取り、8月から3回に分けて被災馬を移動させることになりました。この間、南相馬市では規模を縮小して相馬野馬追が開催されています。

日高町への移送は、8月8日に第1陣として9頭の被災馬が福島県の家畜衛生保健所による放射能被ばくの有無を確認するスクリーニング検査を受けた後、南相馬市を出発。青森一函館フェリーターミナルと陸送によって、翌9日に日高町に到着しました。到着後は



8月27日、法理牧場で愛馬に再開し、喜ぶ南相馬市の馬の所有者

放射線量測定などの着地検査を受けて、町内豊郷地区にある民間の法理牧場に預けられました。8月27日には被災馬の所有者が



27頭が飼養されている旧五輪共同育成センター

日高町を訪れ、愛馬との再会を果たしています。

その後、8月31日に12頭、9月6日に15頭がそれぞれ日高町入りし、この27頭は旧五輪共同育成センターに預けられました。同センターは1年ほど前に閉鎖された競走馬の育成所で、きゆう舎、走路、放牧地があり、広々とした環境で飼養できる格好の施設です。この施設を日高町が借り受け、被災馬の世話は日高軽種馬農業協同組合の農協OBや馬の飼育経験のある4人が担当しています。



8月31日に旧五輪共同育成センターに到着した第2陣の様子



第3陣が到着した9月6日は雨模様だった



旧五輪共同育成センターの馬房に
稲わらや飼葉を敷く高野さん

同センターに隣接する宿泊施設に泊まり込み、馬の世話に当たっている高野恵さんは「預かっている馬なので、無事に返してあげることが第一だと思って、お世話しています」といいます。

受け入れ当初はやせた馬もいたそうで「最初はあまり餌を食べない馬もいましたが、今はみんな食欲があります。また、最初は落ち着きのなかった馬も、今は環境の良さが影響したのか、以前のような行動はなく、落ち着いています」と高野さん。受け入れ期間は今年5月末までの予定ですが、「お別れの時期になると寂しいでしょうね」と笑います。

全国の馬を愛するファンから寄付金が集まる

日高町は4月5日に南相馬市の被災馬受け入れを決定しましたが、このことが新聞やテレビで報道されると、競馬ファンなどから「餌代にしてほしい」「一緒に支援したい」などのメッセージとともに、支援金が寄せられるようになりました。早い人では4月6日の新聞報道の翌日に3万円を送ってくれた人もいます。

そこで、日高町では南相馬被災馬支援金を受け付けることにし、口座を開設。ホームページ等で情報を発信しました。特に、9月に入ってからは多くの支援



9月上旬、旧五輪共同育成センター内で放牧され、伸び伸びと走る被災馬たち

金が寄せられるようになり、12月の段階で78万4千円の支援金が集まっています。支援金は被災馬飼養にかかる経費に活用されていますが、中には被災馬に食べさせてほしいとニンジンを送ってくれた人もいたそうです。

南相馬市から受け入れた被災馬の中には、競走馬として活躍した著名な馬もおり、ファン層が厚く、支援の輪が広がるきっかけになったようです。

地域資源を活用した支援から北海道の役割を見直す

日高町には、10月にも被災馬の所有者が来町し、愛馬と再会を果たした人がいました。その場に居合わせた日高町企画財政課の島尻守主査は「南相馬の皆さんは、われわれのように仕事として馬とかかわっているのではなく、本当の家族のように馬を飼養しています。だから、子どもに再開したような感動がありましたね」といいます。

また、「今回の支援は、馬のことはわれわれが面倒を見るから、安心して復興に尽力してほしいというメッセージを込めています。被災馬受け入れのきっかけは新聞報道でしたが、今では私たちだからこそできる支援だと考えています。施設も人材も知識もあります。受け入れに当たっては、施設の準備や餌の調達など、当たり前のことを段取りしておくだけでした」ともいいます。

日高町の復興支援は、地域資源を有効に活用した日高町ならではの支援策でした。南相馬市との絆を深めただけでなく、復興支援を通じて、地域にある資源を見直すことにもつながったように思います。また、引退馬協会北海道事務所や民間企業など、馬にかかわる北海道の組織や団体が結集して実現させた支援でもあります。馬の文化を引き継いでいく使命があるという北海道の役割を改めて認識させられた取り組みでもあったように思います。